

● 仲間 絢 特定准教授

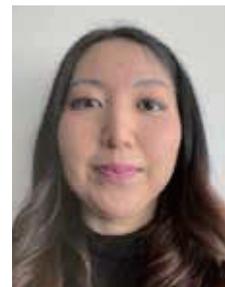
Aya NAKAMA (Associate Professor)

研究課題: 西洋中世における聖母マリアの表象とその女性性
(The Representation of the Virgin Mary and Her Femininity in the Western Middle Ages)

専門分野: 美術史学 (Art History)

受入先部局: 文学研究科 (Graduate School of Letters)

前職の機関名: ハーバード大学大学院美術・建築史研究科
(Department of History of Art and Architecture, Harvard University)



私の専門は美術史学で、西洋美術の重要な題材であり続けた聖母マリアの表象を研究対象としています。西洋中世のキリスト教文化に幅広い影響力を及ぼし、聖母マリア崇敬の主要な図像的源泉であった、旧約聖書収録の『雅歌』の花嫁神秘主義から、聖母マリア美術における女性性の解明に貢献したいと考えています。

聖母マリアに付与された様々な女性的特性—処女にして神の子キリストを授かった母、処女たちの中の処女、教会の象徴としての女性、キリストの神秘的な花嫁、天上の女王などが、宗教的意義のみでなく、聖母マリア像にどのような根源的な役割を果たしたのかについて考察します。図像や様式、作風にくわえて、聖母マリアのイメージがどのように成立し、鑑賞者に受容されたかという歴史的要因に主眼を置き、聖堂の礼拝空間、宮廷の騎士道における女性崇拜、および、修道院の儀礼などのイメージ構築に関わる広く流動的な環境にも着目します。

I specialize in art history, and my research focuses on the representation of the Virgin Mary, which has been an important theme in Western art. I intend to contribute to the clarification of femininity in the art of the Virgin Mary, based on the bridal mysticism of the Song of Songs of the Old Testament, which had a great influence on the Christian culture in the Western Middle Ages and was an important iconographic source for the veneration of the Virgin Mary.

I discuss how the femininity attributed to the Virgin Mary - mother of the Son of God as a virgin, virgin among virgins, woman as a symbol of the Church, mystical bride of Christ, Queen of Heaven, etc. - played not only a religious significance, but also a fundamental role in the image of the Virgin. In addition to iconography and style, I focus on the historical factors of how the images were formed and received by viewers, as well as the broad and dynamic environment in which they were created, including cathedral worship spaces, courtly veneration of women, and monastic rituals.

聖母マリアの崇敬とその女性的特性

聖母マリア崇敬は世界各地で無数のイメージを生み出してきました。六世紀から十八世紀まで千二百年もの間にわたって、西洋美術史の最も重要な題材は聖母マリアであったといわれ、このような一人の女性への崇敬と表象は歴史上、世界に類を見ません。これまでの美術史学では、様式や図像、作品生成の背景をめぐって多岐にわたる問題が扱われ、なかでも「人々がどのように聖母マリアを表現したか、いかなる原典が精神的なイメージを形成する助けとなったか、どのような概念がマリアと結び付けられてきたか」といった観点で重要視されています。そして、これらの問題は聖母マリアの女性的特性—処女にして神の子キリストを授

かった母、処女たちの中の処女、教会の象徴としての女性、キリストの神秘的な花嫁、天上の女王などに沿って考察され、キリスト教信仰の神秘である、処女マリアにおけるキリストの受肉の教義は、神の救済における女性の役割と尊厳を例証するものであると理解されています。このように西洋の歴史を通して聖母マリアは女性の模範であり続けました。しかし、モチーフ、図像、様式、表現のカテゴリー化や作品の比較分析に重点が置かれたため、「そもそも美術作品において聖母マリアのアイデンティティを形成した女性性とはどのようなものであったか」という根源的な問いについては十分な検証がなされていません。

聖母マリアの女性性の根源的役割に迫る—『雅歌』の解釈とその女性表現

ドイツのルペルトゥス、オータンのホノリウスやクレルヴォーの聖ベルナルドゥスなどによる多数の『雅歌』註解は中世の聖母マリア論を構築しました。このように『雅歌』は聖母マリア崇敬の主要な原典であっただけではなく、聖母マリア美術の題材をもっとも豊富に提供した源泉でもありました。

本研究では、これまでその重要性が看過されてきた『雅歌』の花嫁神秘主義から、聖母マリア美術の根幹を明らかにすることを試みます。神学、典礼や礼拝実践において広く確立されてきた人格、すなわち、『雅歌』に登場する女性としての聖母マリアに着目します。つまり、終末に救済される花嫁として、神やキリストにもっとも近しく寄り添う存在である、理想的かつ最高の女性の姿です。頬を寄せ合い、抱擁する、無数の聖母子像の深い愛情を表す表現においてモデルとなった『雅歌』の「花婿と花嫁の愛」、処女性と豊饒性を象徴する「閉ざされた庭」、教会の最高の栄光であり、天上の女王としての聖母マリアの戴冠を表す「聖母戴冠」、「太陽の花嫁」、至上最高の女性、他の聖女たちの模範として聖母マリアが処女たちと集う「処女たちの中の処女」、聖母マリアの究極の処女性を示す「無原罪の御宿り」、また教会や天上のエルサレムとしての象徴としての女性擬人像、天上の楽園や植物（花）の表現など、『雅歌』を典拠とする聖母マリア像を中心に、聖母マリア特有の女性性を検証します。

『雅歌』の解釈におけるキリストの花嫁としての聖母マリアは、聖女や修道女、女性神秘家を中心とした「女性の霊性」においても広く模範とされました。また、後期中世の「一角獣のタペストリー」など、宮廷の貴婦人の表現にもこのような聖母マリアの特性が重ね合わされています。くわえて、キリストの花嫁としての聖母マリアに倣うことは、聖人や修道士を中心として男性にとっても信仰の実践であり、生物学上の性別の垣根を超えるものでした。

本研究は従来の美術史学における聖母マリア像の解釈を、宗教学、文献学、社会学の近年の成果も参照しながら、再構築します。一人の女性への崇敬として、神性と世俗性を内包する聖母マリア美術の両義性を明らかにすることは、現代においても重要な意義をもち、

人類の性の価値観の普遍性と多様性の理解につながると考えます。

参考文献

仲間 絢『『雅歌』の花嫁神秘主義とバンベルク大聖堂彫刻群』三元社、2022年。

仲間 絢「花の表象と女性性：『雅歌』の花嫁神秘主義と近代」『風景の人間学—自然と都市、そして記憶の表象—：An Anthropology of Landscape: On Representations of Nature, Cities and Memories』仲間裕子・竹中悠美（編）、三元社、2020年、pp. 100-125.

Nakama, Aya. (2018). The Sculpture of the Fürstenportal of Bamberg Cathedral: The Eschatological Salvation of Brides in Mystical Marriage, Aesthetics, The Japanese Society for Aesthetics 20, 126-37



図1 上ライン地方の雅歌《天上の小庭》1420年頃、シュテューデル美術館



図2 フーベルト、および、ヤン・ファン・エイク《聖母マリア像》部分「ゲントの祭壇画」1432年、聖バーフ大聖堂